

# 南部藩蘭学の濫觴

藤 原 暹

## はじめに

南部藩医八角宗律（1816～1886）は南部藩における洋学、就中和蘭医学の先駆者として活躍した人物であるが、今日までその学問研究の実態は明らかにされないままにきた。

はからずも、岩手県立図書館他に所蔵される幾つかの宗律関係資料を調べている間に、興味ある事項が明らかになったのでその報告を行うと共に、伊達藩に比してほとんど問題視されなかった南部蘭学の意味についても考察してみたい。

### I. 京都・新宮涼庭門遊学直前

宗律が天保十年（1840）25才にして京都の蘭学者新宮涼庭（1787～1854）の順正書院に入門して9年学問研究に励んだ事はよく指摘される事であるが、その直前にどのような状況にあったであろうか。

これを知る資料として八角宗律自筆記録「御巡見使御病氣御用ニ付万用留」<sup>1)</sup>があるのでこの内容から考察する。（他に天保年間の診察記録も現存する）

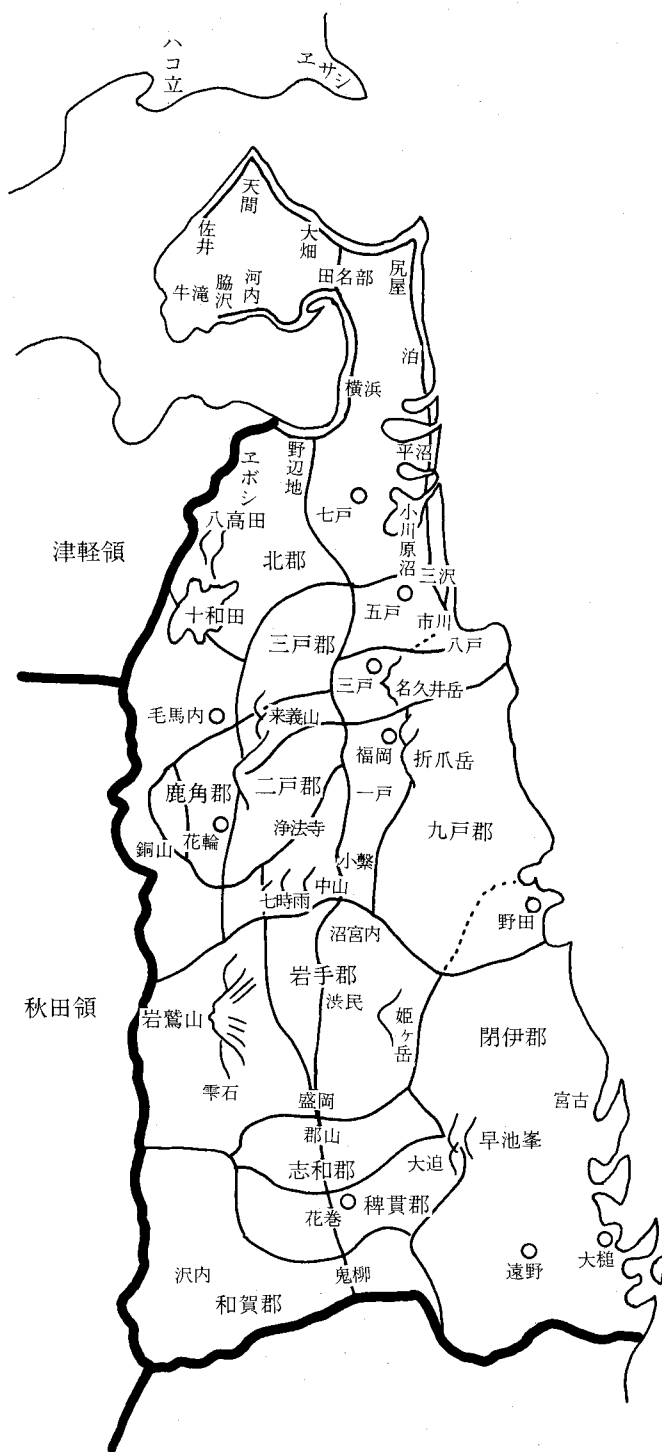
この資料は天保九年の七月七日に盛岡城下で宗律が野辺地（現、青森県上北郡、旧南部領）で幕府の巡見使の一人が病気になったので、その見舞、診察を命ぜられ急遽出向した時の記録である。

七月七日午の刻に「御用之儀有之候栃内宮手共登城可相成候」<sup>2)</sup>と呼び出され、未の刻に登城すると、「於御巡見（使）御用処 宮手仁左衛門殿達ニは 此度御巡見使中根傳七郎様御病氣 御見舞ノ為野辺地迄〇〇遣候間今日此ニ出立可致候」と申し渡される。そこで早速に準備を終え、「亥刻出立 上田之茶屋 川又ニ而 暁天」と北上し、「八日辰ノ刻 渋民ニ到着」する。「達ニハ道中ハ何分人省候様可致段」とある財政切りつめの状況にあったが、川口（現岩手町）に至ると「米も無し、賄仕様無し」という有様であった。これは更に「小繫ニ至候処米無し」空腹に苦しめられる旅であった。

「九日六ツ半時小繫出立 福岡 昼 黄昏三戸ニ到着」する。三戸で野辺地から上ってきた巡見使一行と会う。

ところが、中根伝七郎殿の容態が悪い。

容躰左之通



中根伝七郎様御容躰診察仕候処 御脉沈微御舌白腫御渴キ有之 御心下苦満御息迫甚敷  
小水少御忽身御腫被成…岡井徳順越婢加朮附湯調剤差上候由……御衝心も難斗候。

岡井徳順<sup>3)</sup>は野辺地より附添ってきた藩医である。伝七郎の症状は宗田一氏の教示によれば「心臓脚氣」と推察され、徳順の薬法「越婢加朮附湯」は『金匱要略』によると脚氣の浮腫に用いる越婢湯に朮を加えて小便不利を主目標とし、さらに附子を加えて脚弱（脚氣痿弱）を治そうとしたものという。

伝七郎は「心臓脚氣」つまりビタミンB<sub>1</sub>の欠乏症（脚氣）によって心臓機能が障害され、心筋エネルギーの後退、血液の拍出低下、浮腫、呼吸促迫、「脚氣衝心」状況にあった。通常はビタミンB<sub>1</sub>を補給すれば急速に回復するらしいが、伝七郎は「十日三戸駅出立金田一駅ニ而相診候御手足微冷御息迫御煩悶」と危篤に陥り「御卒去」になる。

金田一駅で巡見使の一人が病死したが、一行は「十日金田一二而御卒去ニ而候得共 盛岡ニ而御卒去之様ニ致候」と死体を盛岡まで運んで葬った。（伝七郎の墓は八角家の墓所光台寺中に隣接してある<sup>4)</sup>。中根伝七郎の件については、工藤利悦氏「諸国巡見使側面考」（奥羽史談67）がある。）

通常、巡見使研究の上でこの件は如何に扱われてきたであろう。奥羽松前派遣巡見使の研究で代表的な菅田宏氏の論文<sup>5)</sup>には次の如く記されている。

天保八年九月二日（将軍家斉に）かわって第十二代将軍に徳川家慶が就任し、翌九年将軍代替による諸国巡見使および御料巡見使が同時に派遣され、しかも徳川幕府最後の巡見使発遣となったのである。奥羽松前巡見使には…御使番黒田五左衛門直良、小姓組中根伝七郎正路、書院番岡田右近が派遣された。しかしこのときの巡見使中根伝七郎は松前の巡見を終えての帰路、病気にかかり野辺地に到着の頃は歩行困難の重体に陥り、天保九年七月十日南部領金田一において死去した。…中根伝七郎の死去によって、その家来一行は盛岡から奥州街道をまっすぐ江戸に帰り、残った黒田五左衛門、岡田右近の一行によって（残りの巡見の）すべてを終えたのである。

伝七郎の金田一での病死と残りの巡見の記事であるが、先述した宗律の記録はいくつもの問題を投げかける。

その一つは、この度の急な出張は「道中は何分人省候様」という藩の財政的困窮状態と「米無し賄仕様なし」という食料不足の実状の下で行われた事である。言う迄もなく天保の凶作（天保三年凶作十五万五千石、四年二十二万三千石、七年には二十三万二千石の損失、九年には凶作打つづき二十三万八千石の損失<sup>6)</sup>）下にあった。

もともと南部の地は繁茂の地ではなかった。天明八年（1788）奥羽松前巡見使に随行した地理学者古川古松軒は天明八年五月六日から十月十八日に江戸に帰着するまでの見聞をまとめた『東遊雑記』を松平定信にも献上した。

その南葵文庫本<sup>7)</sup>は流布本に比しリアリスティックな描写が多いが、特に南部領に対し

て印象的に表現されている。

此辺ハ至て大辺鄙にして筆紙にも為しかたき事のミにして人々大イにあきれし事のみ也。記すれば数多成故ニ爰に記せず。海内にもかかる悪所もあるやとおどろき入し事也。言語解せず人物穢多の如く予も此節ハまたまた食事の変寄物の料理物ニ大ニ屈して東都床敷日数もくり越す様に思う事也。

とか、また

予海内を遍歴して諸州の人物風俗を大抵ハ知り南部の辺鄙ハ膽を潰せし事也。又生涯の癖の種に成べし。

本来的に生産力が低く辺鄙な地が、連年の凶作でこの上ない困窮に陥っていた。

しかるに時の藩主南部<sup>ただ</sup>利済は「盛に工事を起し、大奥に広麗なる建築をなし三階の居間を長生楼と名づけ、新丸を壊ち広小路・清水の二御殿を造り津志田に遊廓を設けるなど莫大の財を空費した。これがために領内富豪に過大の用金を課し、農民一揆各所におこる<sup>8)</sup>」という事になった。天保七年和賀・稗貫一揆、野田通百姓一揆、大槌・宮古花輪通一揆、八重畑・関口村知行所一揆、福岡通一戸一揆等相ついで起った<sup>9)</sup>。

本多利明はこれに先立ち天明の大飢饉での惨状を「相馬領、岩城領、南部領、津軽領、仙北領辺皆同じ。往還端に死骸・白骨夥數前代未聞とは如<sup>レ</sup>此」と記し、「時に臨んで国民の飢渴を救うの策」として「オランダ天文・地理・航海の治法」<sup>10)</sup>を唱えた。そしてかかる治法の実現こそ「国君の万民に父母たる天職にして是非共せて叶はぬこと」<sup>11)</sup>であるとした。

利明がひたすら求めた「賢君明王」や「英傑」の仁政像には南部も利済公もおよそ似ても似つかない状況にあったのである。

しかし、南部藩財政の打開のために京都の蘭医新宮涼庭が招かれ天保十一年六月廿四日、盛岡城で改革意見を述べる。(天保八年の涼庭の自画賛には「余越前候南部侯の国事に与かる。時に天大霖を降らし年登<sup>みの</sup>らず、議する所の制度幾たびか阻塞して行われず」<sup>12)</sup>とある。天保十一年の盛岡行き以前に涼庭が南部藩政と関係をもっていた事は確かであろう。

それは、利済が浪費の穴埋めに三都の商人より金を借入れており、京都で医事のかたわら蓄財に秀でていた涼庭の立場において南部の借入に全然無関係であったとは考えられないからである。)

この時涼庭が改革の所信とした点は「上盛岡少将公」<sup>13)</sup>に詳しく述べられている。その中に「曰く学校を設けよ。曰く賞罰を明かにせよ。学校興れば風俗敦く、賞罰明らかにして人材出ず。是れ其本を立る也」とある。制度の厳と人材の養成にあった。

涼庭は七月二十二日に盛岡を出立し帰途につくが、その際「帰るに臨み、侯侍医八角宗律、飯富了伍に命じ其門人となって随行、京に入て十年の遊学を勧む」<sup>14)</sup>と宗律、了伍を伴い京都で蘭学を学ばせようと図ったのである。しかし、ここに一つの悲劇もあった。

宗律の記録に、当初新宮門に入り蘭医学を学ぶ筈の者は宗律と了伍といま一人江幡春庵が居た。しかるに天保十一年涼庭出立以前に罪のために籍を除かれた父道俊のために、同学することが出来なくなったという。<sup>15)</sup> (春庵に関しては別稿を用意している)

春庵は後、藩主擁立事件で利剛派によって捕えられ嘉永二年獄に投ぜられ、獄中で毒を仰いで憤死したと伝えられる。なお春庵の門人に坂本春汀が居る。

## II. 新宮門における宗律、了伍の学問

京都南禅寺山門西方に天保十年三月涼庭は「順正書院」を建設した。建設の目的は、『順正書院記』の近藤義利他の寄文がよく説明しているといわれる。

涼庭新宮先生…人の夭枉を憫み、衆を済うに切なり。毅然として志を立て、嘗て瓊浦に学ぶ。淡を食し苦を攻め、術業精詣、痾を愈し痼を起し、遂に居を洛陽に移す。…遭し洛陽巨儒出すと雖も、唯家庭に講述しまだ学校の設淳古之治を想望する者あらず。…先生坐視するに忍びず義を奮い金を捐し、其覲脊を随え、草を刈り木を伐し、工を鳩めて経営し新たに書院を造る<sup>16)</sup>。

とし、また篠崎弼は

今の上下姦声乱色淫楽匿礼を以て其聰明心術を害せざる者或は寡し。是涼庭之医国之志有る所以也。今其の諸侯に献ずる所の説を書院に移し、天下の人材を育成し、以て国家太平の恩沢に報ぜんと欲し…<sup>17)</sup>

と記している。涼庭は医者であるが、「医国之志」<sup>18)</sup>があり、幕末諸侯の財政の立なおし以外に、淫靡の世風の中で将来の人材を養い、医術国家の建設をも夢見たのである。かかる涼庭の意志に沿うべく入門してきたのが、宗律であり了伍であったのである。

順正書院の特色は医学教育に八学科（生象学則、生理学則、病理学則、外科学則、内科学則、博物学則、化学則、薬性学則）を設けて系統的に教育した事にあるという。この八学科が注目される対象であるとすれば、教育方法としては

先生講釈の外、毎夜塾生として討論せしめ又毎歳寒中三十日間、暑時二十日間を以て討論会を設く。又毎月三次儒師を順正書院に迎えて経学文章等を講じ、先生亦自ら翻訳書或は傷寒論を講ず。常に曰く、医学は会読討論躬自ら苦辛するに非ざれば心根を貫徹せず。<sup>19)</sup>

涼庭の講義は蘭書の翻訳講義と傷寒論の講義であった。

ところで、岩手県立図書館には宗律京都遊学の日記『在京記』の自筆本が残っている。それによれば、八月五日に最初の講義を受けた模様である。

五日終日陰る。今朝より始て講席に臨む、先生毎朝外科則を講釈す。大久保大造隔朝内科選要を講釈す。

とある。大久保大造とは陸奥出身の先輩であり、師の講釈の一部分担していた。涼庭は蘭

語の教授を直接にやらなかったらしい。

十一日晴、先生の命を受けて、蘭書読誦のため、束脩として一方金をささけもて宮本元甫うしの門に入りぬ。是は馭豎斎の賓弟にして書生を教授す。京師におゐて原書に名ある人なる。

門人宮本元甫が代って蘭語の手ほどきをした。

初歩から勉強したらしく、

廿三日、晴 医範提綱会読はじまる。定日隔夜。廿四日、晴 解体新書会読はじまる。  
定日隔夜

とある。宗律が師の仕事を手伝えるようになるのは何時頃からであろうか。

『鬼国先生言行録』の末尾に「先生著述書目如左方」という涼庭の著作目録がある<sup>20)</sup>。それは『究理外科則 原著護<sup>ゴ</sup>爾<sup>ニ</sup>篤<sup>ト</sup>兒<sup>ニ</sup>氏<sup>ニ</sup>」以下『療治瑣言』に至る10書である。年代的には文化十二、三年頃長崎における蘭学研究時から安政五、六年頃までの涼庭の代表的な著作群である。この間、涼庭の蘭医学翻訳を受け、その筆記校正等に宗律たちが関与してくるのは天保十三年頃からである。

『療治瑣言』は前篇四冊 天保十三年頃刊行で後篇は未刊である。「目録」には、  
辺境僻邑良医ニ乏シク又ハ遊学ノ諸生師門ニ投ジテ多年ノ功ヲ賞ヘタキ者ノ為ニ先生日常経験スル所ヲ述ベ 且ツ漢蘭古今諸名家ノ説ヲ透見シテ諸病ノ大略治療ノ捷徑ヲ示サレタル便利ノ書ナリ。<sup>21)</sup>

とあり、治療の大略を示す入門書の数であった。この書の筆記は「紀府 有馬崔信」で、校正が「福知山有馬文哲、盛岡八角高遠宗律」であった。天保十一年の入門後2年で頭角をあらわし始めるのである。

涼庭の『窮理外科則』はその出版順序が次の如くである。

- |     |         |              |
|-----|---------|--------------|
| 第七篇 | 上, 中, 下 | 文化十四年 (1817) |
| 〃三  | ? 亨 ? 貞 | 文政五年 (1822)  |
| 〃四  | 一       | 文政六年 (1824)  |
| 〃五  | 一 ~ 五   | 天保二年 (1831)  |
| 〃二  | 一・二     | 天保七年 (1836)  |
| 〃六  | 一       | 弘化三年 (1846)  |
| 〃一  | 乾・坤     | 嘉永三年 (1850)  |
| 〃八  | 一       | 〃            |
| 〃十一 | 一       | 〃            |

(第九, 十, 十二, 十三不明)

この中で第六篇の輯録は「陸奥八角宗律高遠」であり、初篇の筆録は「盛岡 八角宗律高遠」である。ところで宗律が第六篇の輯録出版を行う前年涼庭は娘松の病氣療養を目的

に城崎温泉（丹波の出身であるから久方ぶりに郷里を訪れる目的もあった）を訪れる。しかし城崎滞在中も涼庭は診察を続け、四月二十二日には児童の重体のため、「宗律にプレンキの小児書と薬品を持参させた。宗律は京より四十里を急ぎ来った」という<sup>22)</sup>。すでに師不在中留守を与る重要人物となっていたのである。

さて『言行録』の「目録」にないもので『駆豎斎方府』がある。この書の題言<sup>23)</sup>は「盛岡侍医 八角高遠」が弘化四年春に記したものであるが、この翌年に盛岡に帰郷している。従って涼庭門での一応のしめくくりの仕事であったと考えられる。

一方了伍の仕事であるが、彼が宗律と共に『窮理外科則』の第六篇、初篇の校者として関与した事は知られ、宗律と共に門弟中重視されていた事は弘化二年（？） 文阿弥楼に門弟と会した時の詩でも分かる。なお、『在京記』ではよく二人で行動している。

南部国公識鑑明らかに

我に託す宗<sup>八角</sup>了<sup>飯富</sup> 宗<sup>了</sup>了<sup>了</sup>伍<sup>了</sup>は囊中の錐  
……門に入れどまだ堂に升らざる者あり  
二十三名璞疵無し  
我は天幸を得て此上に座し  
昂然自遍吟髭を撚る。<sup>24)</sup>

了伍の仕事として『駆豎斎医則括要』の筆記がある。岩手県立図書館蔵の写本は「嘉永四年六月写之盛岡 鈴木連治」とあり鈴木連治が写したものであるが、更にこの写本には「京都室町夷川上ル 新宮涼民門人 鈴木順庵」という記入もありかなり読みつがれたものである。鈴木連治とは「奥州岩手郡盛岡鈴木京齊主 鈴木連治」との書き入れもあり、盛岡在住の医者であったらしく、おそらく順庵はその近親関係者であろうと考えられ、涼庭の養子涼民に入門していたのである。

この『医則括要』は東北大学医学部に二本所蔵されている。いま簡略に対照してみる。

つまり、県図本では上・下二巻が一冊本となっていて、「上」は「薬性命総論」と「薬品主类総括根性素剂部」の二部分、「下」は「下剂」以下の配剂の説明となっている。

東北大本は二本ある。その一本は「薬性天総論」からはじまり、県図本の第五丁～第二十二丁までのいわゆる「上」に当る部分が記述されている。この後に東北大本には各薬剂に属する薬品名が列挙されている。

例えば

緩和剂 水剂 雨水、何水、泉水等之家気諸乳汁湯水  
といった類である。

いま一本は、最初「序」があり「例言」「目次 配合総論 変合部」とあり「第一章緩和剂変合」以下「第二十五変合」までである。この変合部分は県図本にはない。いわば県図本の応用篇とも目されるものである。

つまり、県図本はもともとのコンパクトな形体を有していると考えられる。因みにその「序」のみを比較してみる。

県図本の「序」

此書ハ大西古今医書ヲ誦読シ且「トーマス」「ゴルトル」「フレンキ」「スーイテン」「デラハアイヲ」「イベイ」「コンスブリュク」「レルヘエラント」瑗瑠在館之諸医「ヘールケ」「ブレイ」「ドホク」「バティ」「スロイテル」「ハーケン」之口訣ヲ取り加フルニ余カ見所ヲ記シテ編シタル者也 今俚言ヲ以テスルハ冀クハ読者ヲシテ理會シ易カラシメンコトヲ 然レトモ義理幽微毫髪ヲ割ク之間必モ筆シ尽シ易カラス 是ヲ以余力家学ニ通セサル者ハ此旨ヲ得ト雖トモ用ナシ 余乃チ諸弟子ニ示シテ謂百誦ハ一聞ニシカス

文化六年初冬識於平安駆堅齋燈下

つまり、蘭書では、J. de Gorter (1689—1762), J.J.E von plenck (1738—1807), A. Ypey (1747—1820) 等の書を翻訳会得した知識を、また直接蘭医としては長崎在館の医師たちから説明を受け自説も交え論述したものであると言う。一方東北大本の「序」は

配合ノ名たる<sup>アルチン</sup>廣爾鎮<sup>窮理學</sup>者<sup>之</sup>名<sup>ヲ</sup>究理則其他医書ニ見エタリ<sup>フルメンデ</sup>慈訳配合術畢意衆味品類ヲ聚メテ配合スルノ謂ナリ余ガ旨トスル所ハ其術ヲ学ンデ薬剤使用ノ法ニ供ス皆是分劑煅煉ノ術ニ本ツキヲ起ル所以ノ学ナリ。医の日用急務ナリト雖モ世ノ和蘭医道ヲ主張スル者トモ之ヲ唱ヘサルハ何リヤ…

時維文政六年初冬識於平安室町街駆堅齋書窓 鬼国山人 新宮碩涼庭

明らかに東北大本は後に叙述されたものであり、県図本の配剤を更に細かく展開させたものと言える。

以上、宗律や了伍の涼庭門での医学学習の様様であるが、また鈴木順庵の如く他にも京都に遊学する者も出てきて南部の蘭学もやっとその動きが活発化してきたのである。一方、緒方洪庵適塾には大島高任、佐郷屋恕伯、伊東玄朴象先堂には是川宗慎、室岡徳融などが入門している。<sup>25)</sup>

### III. 盛岡帰藩後の宗律

宗律は弘化五年(1848)に帰藩し、嘉永五年(1852)には奥詰医師加、嘉永七年(1854)には診御医師、安政元年(1854)に奥御医師に累進した。そして安政二年正月藩校明義堂の医学教場になっていた下小路御薬園でシーボルト門下の岡研介の『人身生理』の講義を行なった。<sup>26)</sup>

この帰藩後の彼の学問研究の様様を知る資料として『答難則』がある。<sup>27)</sup>

『答難則』とは医学上の難しい問題に回答を書き出させ、それに評価をして互に研究を深めたものである。

「嘉永四年十二月廿九日 一致堂門人杏庵 筆記 宗積」以下「文久二年季冬仲五」ま



で、10年間に亘る記録が残っている。

まず、この記録から南部藩における新しい蘭医学に関係した若きエリートの実態を探ってみる。嘉永四年～六年までの四冊をとりあげてみると次の如くである。(A. Bは筆者補)

A. 問 所飲食者 不論何色化為乳糜則為白色而大便則為焦黃色其理如何

という問に宗積、元貞、杏庵、了庵が答えを出し、その答の上に各々丁、丙、甲、乙と評価が下されている。そして、例えば乙をもらった了庵の文には「語脉連続畧得大意則為乙」といったコメントが附してある。

「嘉永五年十一月廿三日」は

B. 問 飲食消化之機出於何等物而其栄養身軀有如何運化

という問に宗積、杏庵、元貞、恭園、友泉、祐積、弥藤太と7名が答案を書き、各々丁、乙、丙、甲、乙、丙、丁と評価されている。甲をとった恭園の答案には「文章首尾相応簡而要」とコメントがついている。

さて、こうした研究は誰によって主宰され、問題が出され評定されたのであろうか。

筆記者の多くは「一致堂門人」とあり、その中に宗積が頻出する。また、「一致堂主人記」として以下の文もある。

新宮涼閣 嘗寄書曰 近年京師婁麻質斯毒大流行……実芟答利斯海葱以開利水液而後與緩和鎮痘劑以鎮制痙率全硫黃精汞以開達驅散其原毒庶幾乎得其機

一致堂主人記

新宮涼閣と交通し、「屢麻質斯」(<sup>(リユウ)</sup>レオマチ)の流行と対処法<sup>28)</sup>について考察し得た人物で、門人に宗積をもった者は唯一人八角宗律である。

つまり宗律が京都遊学から帰盛して間もなく、長子の宗積をはじめ藩内のエリートを啓蒙していたのである。(宗律の号杏齋を用いた「杏齋 答難則」という綴りも残っている)

では、どのようなエリートが集まっていたであろう。宗積と並んで名前が頻出する人物に恭園という「甲」をもらう医者がある。これは同資料中「廻生堂門人 立憲」とあり、また「及川立憲筆記」とある所から推すと、三浦恭園である。廻生堂という塾を文久年間盛岡に開いた三浦恭園が嘉永年間には宗律の下で研讀を続けていたのであり、その初期の門弟及川立憲をこれまた宗律の所で学ばせていたのである。(また佐郷屋友元門人立益、元達も参加している)

『万延元年 御城下身帯帳』に徴すと、祐積は穴沢 本道御医師 式人扶持、立元・杏庵は三田で立元は本道 三人扶持、いま一人の立元は鷹羽で鍼科御医師 式人扶持である。

資料中に成績はあまり芳しくないが熱心に参加している弥藤太なる人物がいる。松本弥藤太という藩の馬医で後に橋野鉄鉦山吟味役となった人物である。

ところで、文久元年四月盛岡藩の同志22名が洋学館日新堂創立を目的にした結社の盟約を結び、同年八月連署して洋学館設立に関する請願書を提出している。<sup>29)</sup>

この請願書に署名している同志の中に、八角宗律、宗積がおり、松本弥藤太、三浦恭園等先述した「答難則」の関係者がいる事は後述するように意味深い。

なお、これらの他「答難則」に登場する人達は次の如くである。

坂本春江、阿部正巳、佐藤友一郎、赤坂謙吾、照井成美、小原昌益、四方恭吾、江刺家通悦、園子精一郎、金浜質之助

(『明治三年医学局当番日記』によると、十二月十四日に坂本春江、江刺家、小原、佐藤、等が医師免状を与えられている。)

次に「答難則」では如何なる内容の研究が進められていたであろうか。

まず問題を掲げ、それに対する評価の明確な解答例を基に考えてみる。

前述のA、B 2問に続いて次のような問題があげられている。

C問 汗尿涕淚津唾五液之性質官能如何

D問 小兒多患百日咳中年多患勞咳老年(人)多患喘咳其理如何

E問 脉有浮沈遲數強弱細大或不齊或結代何等所為

F問 人之飲食也經若何道路而為榮養而為排泄

G問 喘息之原因並治法如何

H問 肺臟生象生理如何

I問 心臟生象生理如何

J問 動脈之形質官能

以上の部分は1問が1つの綴りとなってまとめられているが、明確に年月日の記されたものと明確でないものがあり必ずしもどの問から次問に展開したか否かはさだかでない。しかし、「喘息之原因並治法如何」は「万延元年極月下旬」と明記されているのでかかる質問は後に発せられたものと考えられる。

いま1つ残存する綴りは「安政四年巻」とある。ここには

K問 腸之生象官能如何

L問 凡活物之在大氣中也有何等物理而得如何利益又受如何障害

M問 感冒与傷冷毒其原因症候並治法如何

N問 黄疸與黃胖其症候原因並二治法如何

O問 一男子歳六十脚變急施雷火鍼次而心下苦悶脉結代或五六動一止或十數動一止其症属何等之症其統症如何之变化其治法如何而可也

P問 犬病流行論

Q問 鼻之生象官能如何

この最後の問が「文久二年」のものである。出題から考えられる事は1つは肺臟、心臟、動脈、腸、鼻といった人体各部の「生象生理」を問う事にあつた点、いま1つは百日咳、老咳、喘咳、感冒、黄疸といった病気の「理」や「原因」を問うことにあつた点である。

これら質問に対してどのような解答が出され、それに対して如何なる評定が下されたであろうか。

例えばB問に対して、元貞は丁、宗積は乙、杏庵は丁、友泉は乙、恭園は丙、祐碩は甲である。丁の解答については全体的に内容に乏しい故かほとんどコメントが附されていない。

乙の解答には文字の修正削除と共に文中に……という記しが附されている。それは「纖維軟弱」「感觸甚敏」「肺管亦軟脆故此病易染矣」「一種之流行病」「因労働」等である。これに対しこの時めずらしく成績の悪い恭園には「欠労働」とある。

では甲をとった答えは「小兒者腦髓脊髓及神經此他部則頗多且軟弱也……衣膜殊導」という文の横に「論出人意表」とコメントがあり、また「論的中」とある。そして終りに、「欠老人躰質之論惜哉」「此対如論 老人躰質則超出衆位数等惜哉間尔有確論亦可以為甲」と記されている。

つまり「人躰質之論」が確かに論じられているか否か、説明用語として「一種之流行病」「労働」といった用語の使用とその概念が把握されているか否かといった事が評価の基準となっているように考えられる。

いま1例L問を考えてみたい。この問は大気の物理性を問い合せてその得失を論じさせたものである。難問である。

良珉は巳、宗積は甲、立益は戊、立顕は巳、亥周は丁、宗泉は丁、杏庵は丙、祐積は乙、という評定が下され、甲から巳まで五段に分けられている。

巳の答案には「此文難解」「論説疎漏」とあり、甲の答案には「能熟読氣海觀瀾」「能熟医几提綱」「能熟読原病雖」とあり更に「頗得要領當在甲位」とされている。

『氣海觀瀾』とは幕府天文台訳官であった青地林宗が文政十年(1827)に我が国最初の物理学書として出版したものであり、林宗の娘婿川本幸民が増補して『氣海觀瀾広義』を出すまで広く啓蒙的役割を果たしたものである。また、『医几提綱』は作州津山藩医宇田川玄随の養子宇田川玄真が西洋解剖学書数書を翻訳し出版したもので、『解体新書』などに比し一層の精細さを加えたもので、医師の必読の書であった。(なお宗律の学んだ新宮門では涼庭の死後4年、養子涼閣が涼庭の遺稿をまとめて出版した『解体則』は「『医几提綱』の欠を補うもの」であり「解体則は純粹の西洋解剖書であり、その解剖学用語は今日のものと甚だ近い」と評価されている。)

つまり、西洋(和蘭陀)の物理学や解剖学の知識を基にした病理論が求められていたものであり、そうした理論を質問と解答の間に確かめ合っていたと言えるのである。という事は、医学上の概念の統一と普遍的な認識を確定しつつあったと言うことである。

宗律が以上のような医学研究の場を形成していた時、南部藩では盛岡藩校明義堂に医学を採用した。安政元年十二月三日付で、

- 一、医学助教 本堂通伯, 宮杜箕山
- 一、医学補助 上野祐達, 坂本春汀, 青木恭伯
- 一、医学句読師 本堂了專, 岡井尚綱, 工藤玄通

等が任命された。これらは漢方医学派に属する人達であった。というのは明義堂の改革に着手した江幡五郎（奥医師江幡春庵の弟）ですら安積良斎（朱子学派・昌平黉教授）の門下であり、後に考証学派東条一堂に学んだ漢学派であった。

宗律は安政二年（1855）に助教に任ぜられ、蘭方医岡研介の『人身生理』の講義を行った。「人身生理」とは同じシーボルト門下の高野長英の『医原枢要』（天保三年）に始まると言われる「人身究理」（physiologie）の学つまり生理学を意味するものと考えられる<sup>30)</sup>。広瀬元恭の『人身究理』について藤林普山の『生理真源』, 新宮涼庭の『生理則』が著わされた経過から「人身究理」という用語概念が約って「生理学」となった<sup>31)</sup>。宗律がかかる理論を教える事は彼の自論「先ず其の生象生理病理薬性を究めずして徒らに此の方則を用いれば即ち所謂天然証すべからざるの理を失して固陋偏執之害生ず」<sup>32)</sup>という考えによるものであった。

つまり西洋医学の理論に根拠を置く教授であったが故に、守旧的固陋な漢学派の反対に会い、明義堂御用懸り目付によって講義差し止め処分となり、医学助教授免職の結果となった。<sup>33)</sup>

先述した「答難則」研究グループの人達が日新堂創設の盟友となっていくのはまさに、「答難則」の学問的内容・思想から必然的に導かれた方向であったのである。

#### IV. 南部蘭学の問題点

以上、宗律を中心に蘭学が組織的・体系的に学習され、南部の地でその芽が育ってきた点を辿った。

ところで、宗律迄蘭学の導入はなかったのであろうか。

呉秀三著『華岡青洲先生及其外科』には、青洲の南部関係の門人を次の如く紹介している。

文化三年	南部盛岡	熊谷良順
同	岩手郡	菊地寛蔵
同	二戸郡福岡	田中了和
天保十四年	南部	木村良策
安政二年	盛岡	榎 玄範

言うまでもなく、青洲は京都の吉益東洞の子南涯について古医方を学び、伊良子道牛の門下大和見立の養子見水に和蘭陀流外科を学んだ漢蘭折衷派の医者であった。<sup>34)</sup>（新宮涼庭も漢蘭折衷派に入る）特にマンダラゲの煎剤麻仏散という麻酔薬を用い大手術を実施し青

洲流の外科を全国に広めた事は周知の通りである。この青洲から南部ではじめて金創治法の免許皆伝を受けたのは田中了和である。<sup>35)</sup>彼は南部福岡の役医田中了節の長男で寛政九年48歳で没した。時に子了和15歳で、後24歳で青洲門に入った。後見役として了知を助けたのは了節の弟田中玄竜である。<sup>36)</sup>

青洲の蘭学はいわゆるカスバル流外科といわれる学統に属する。日本に來航したオランダ人外科医 Casper Schaemburger から伝えられ外科治術の流儀を指す。このカスバルの來航に関して馬場貞由以来、寛永二十年六月南部山田浦に漂着した蘭船にカスバルという外科医が乗船していて、保護されて江戸で和蘭外科術を伝えたと言われてきた。かかる通説を背景に森嘉兵衛博士は、

幕府はこの船医を抑留しオランダ医学を、特に外科手術を役人たちに教えこませた。このように蘭学そもそもの発祥の源は南部藩であった。…それから150年経った安永年間に、一ノ関の藩医建部清庵が江戸の蘭学者伊東玄朴(マツ)に対して、「蘭学は切った張ったの外科ばかりで蘭学とは外科のことではないのか」と質問している。一見幼稚な質問のようにみられるが、当時江戸一流の蘭学者といわれる伊東玄朴(マツ)が真正面から受留め…日本洋学の道を開いた。<sup>37)</sup>

と述べている。文中「伊東玄朴」とあるのは杉田玄白の誤りであるが、実はカスバルが南部に漂着した事もそれ故に南部が蘭学の発祥の地である事も誤りなのである。『長崎オランダ商館の日記』に照合してみると、「1644年2月1日奉行権八殿から南部からきたオランダ人十名の氏名の届出を命ぜられて提出した」<sup>38)</sup>氏名の中にカスバルも外科医も入っていない。カスバルの名が出てくるのは同日記の中の「アントニオ・ファン・ブロウクホルストの日記」の1649年11月5日以降の部分である。<sup>39)</sup>ブロウクホルストは商館長で同年12月31日江戸に参在したが、同行者中江戸滞在した者として「商館員ウイルレム・バイレフェルト、砲手ニリアーン・スヘーデル、医師カスバル・スハームベルヘル、伍長ヤン・スミットである」<sup>40)</sup>と記されている。また1651年1月5日の「ピーテルステルテミウスの日記」には、また今回も前回の医師カスバル・スハームブルヘルを同伴した旨述べたところ、(大目付筑後殿は)甚だ喜び、明日彼をその邸に招きたいと言い…明日早く彼をその邸に招かれた。<sup>41)</sup>

とある。南部漂着船とカスバルとは無関係であった。と同時に、南部蘭学発祥観にも疑問が出てくる。この点に関し、玄白の『蘭学事始』の記述を考察してみたい。玄白は長崎の阿蘭陀流外科として「西流」「栗崎流」等の由来を述べた後に、次のように言う。

又、古来カスバル流といふ外科あり。これは、寛永二十年南部山田浦へ漂流ありし阿蘭陀船の人数之内江戸へ招呼れたる中に、カスバル某といふ外科あり。三四年留置れ其療法を学せられし者もありしが、追々長崎へ御送りのよし。江戸並に長崎にても正保の頃、此カスバルより伝来の療法ありしと。詳なる事を不知ども、後にカスバル流と唱ふる事

と申事に哉。又別にカスパル姓の外科渡来の事もありし。此他、長崎にて吉雄流などといへるは…其諸家の伝書といふ者共を見るに皆膏薬・油薬の方のみにて委き事なし。斯の如き類にて備らざる事而已なれども、其わざは漢土の外科には大に勝り又、本邦の古へより伝りたる外治には大に勝れりと言うべきか。<sup>42)</sup>

文中「別にカスパル姓の外科渡来の事もありし」というのが正しい事はすでに述べたが、玄白はここで更にカスパル流という和蘭医学が「膏薬・油薬の方のみ」で「わざ」の学問であると注目すべき発言をする。これは、自分達の江戸の蘭学が質的に異ったものであるとの認識を背景にもったものである事を物語る。ではそれは何か。まず、「横文字学ぶ事」という翻訳学でありそれは青木文蔵に起点をもつ「江戸にて阿蘭陀事学ビ初めし濫觴」である点である。次に「御国解剖の書手に入りしことなれば、先其図を実物に照して見たきと思いに、実に此学開くべきの時至けるにや」<sup>43)</sup>という解剖学の導入という点にあった。

このように玄白によって自覚された「蘭学」を蘭学の起りと把握するなら、(もともと玄白のみの自覚ではなく江戸を遠く離れていた伊達支藩、一ノ関の建部清庵なども抱いていたものである) 南部福岡の田中了解和の蘭学などは南部蘭学の発祥とこれまたみる訳にゆかなくなるのである。

玄白流の和蘭訳学と解剖学的要素を合せもつのは宗律をもって最初とすべきであろう。

更にいま一つ宗律をして玄白流蘭学に近い存在と把握し得る点をあげておく。

和蘭医学の西洋自然科学的な理論と方法を身につけた玄白はやがて「凡人の大病を受、重きに至りても良医に託し、其数を守り、能く摂養せば何程老体の衰病にても又命を延る筋もあり。……国家も將に乱れんとしても政を能改る時は再び太平になるものと聞り」<sup>44)</sup>と幕藩体制の「衰弱至極の世」<sup>45)</sup>に対し国を医する経世論を展開する。医学と経世論とがこれ又結びついていたのである。

前述した如く宗律の医学研究グループはやがて和蘭陀医学から西洋砲術に研究を拡大し帰藩した大島高任の強力な援助の下に洋学校建設を建言し文久三年(1863)三月日新堂はその設立が許可される。

この時、宗律は「日新堂之記」を記しているが、そこには見事に洋学と経世論とが結実しているのである。

方今宇内の形勢を察するに、各国相競い百学を研究し諸術精を尽くし、物産を開き航海を利し、互市を起して国を富ます。…わが藩におけるや五穀・百果・金・銀・銅・鉄・薬草・木材・魚鱉・海草はあるに随いその有に富む。しかし学術いまだ開けず、諸業いまだ明らかならず、惜しむべし、物産の地に埋もるを。ここにおいて有志協同して学館を創立し、洋学を開きて舎密、物理の学より医術・物産の諸学に至るまでこれを研究して盛大に事業を起さんと欲しこれを藩庁に請う。<sup>46)</sup>

これは、ターヘルアナトミア翻訳開始の明和八年(1771)より90年後、司馬江漢が「西

洋ノ諸邦，商舶ヲ万国ニ通ジ，其長官ナル者ハ交易ノ余暇，書ヲ編集スルコトヲ務メトセリ，嘗テ到処ノ風土・物産，或ハ身ヲ脩国ヲ治ルノ經典ヲ聴テ，己ガ邦ノ辞ニ翻訳ス」<sup>47)</sup>と述べた寛政七年（1795）より約70年後であった。

隣接する伊達支藩一ノ関においては玄白一二代清庵の交渉をはじめ，門下大槻玄沢の玄白門入門，子清庵の江戸遊学，更に天明五年，明和八年の江戸骨ヶ原の「観臓」より15年後刑死者豊吉を解剖し「医学上の千歳之大疑」<sup>48)</sup>を明らかにしたのである。

南部蘭学はその濫觴を語るにはあまりにも遅きに失する感を免れがたいが，しかし，その内容において決して劣るものではなかったと言える。

この事は南部藩において医学を中心にした洋学がその芽をふき出した時，すでに新しい軍事科学をめざす洋学が同時的に志向されるという事態にも関係する。この端的な表われが日新堂の社中構成である。八角宗律と大島高任という二人の総督をもち一方が医学，一方が西洋砲術を役とした。そしてその下に三浦恭園，八角宗積等の医学者と大島福治（高任の舎弟），松本弥藤太，工藤陣八等鉾山師と吉田慶右衛門，三田村勘次郎，葛儀兵衛等の砲術関係者が併存しているのである。八角宗律の長男，宗積は医者であると共に大島高任と交渉をもち「御目付御鉄砲方改役」としても登場するのである。

さて本稿は宗律と新宮門との関係を中心に南部蘭学の起りを見た。洪庵門と佐郷谷恕伯や日新堂以後の宗律達の問題が残されているが，これらは全て別の論考にゆずりたい。

昭和62年3月20日記

## 注

- 1) 岩手県立図書館蔵
- 2) 枋内与兵衛，宮手仁左衛門。特に枋内与兵衛は後に側用人兼海防御用掛となるが，日新堂創立の際願書を提出して許可の促進をはかった。
- 3) 『万延元年 御城下身帯帳』によると「六拾石壺升式合 内五人扶持」とあり「鍼科御医師」の四位にある。
- 4) 盛岡市名順川町。ここには八角宗律，高英父子，日新堂教官で象先堂に学んだ室岡徳触の墓もある。
- 5) 「諸国巡見使の研究—奥羽松前派遣見使を中心に—」『福島県立歴史資料館研究紀要1号』1979
- 6) 『盛岡市史・再読人物史』「南部利済」の項 昭57
- 7) 拙著『日本生活思想史序説』ペリカン社 昭57，132～145P
- 8) 前記『盛岡市史』93P
- 9) 『岩手史叢第四巻 内史略(4)』岩手県立図書館 昭49，515P～
- 10) 『本多利明・海保青陵』日本思想大系44 岩波書店1970，126～127P
- 11) 同上 34P
- 12) 山本四郎著『新宮涼庭伝』ミネルヴァ書房 1968，117P
- 13) 同上 124P
- 14) 同上 123P
- 15) 前掲『盛岡市史』「人物誌」98P

- 16) 前掲 山本著 173 P
- 17) 同上 177 P
- 18) 同上 70 P
- 19) 同上 180 P
- 20) 同上 204 P
- 21) 同上 215 P
- 22) 同上 89~90 P
- 23) 同上 220 P
- 24) 同上 263 P
- 25) 『岩手県医師会史上, 下』岩手県医師会 昭55。
- 26) 前掲『盛岡市史』362 P
- 27) 『答難則』の存在については早く太田孝太郎氏が簡略に『盛岡市史』で紹介され, 又, 吉田忠氏は『蘭学と解剖』『日本思想史学18』昭和61で, それが解剖学用語を多く含む事を簡略に指摘している。
- 28) この点に関して宗田一氏の教示を得た。
- 29) 長岡高人編著『岩手県教育史』思文閣出版 昭和61, 223 P~以下
- 30) 富士川遊著『日本医学史』形成社 昭47, 527 P
- 31) 同上 530 P
- 32) 前掲 山本著 220 P, 掲載の「題言」による
- 33) 前掲 長岡著 217 P
- 34) 京都府医師会編『京都の医学史』思文閣出版 昭55, 504 P
- 35) 岩手県医師会編『岩手県医史会史下』岩手県医師会 昭55, 142 P
- 36) 同上 493 P~495 P
- 37) 「岩手医療史における三田俊次郎先生」『岩手医科大学月報179, 180, 181, 182』昭53, この論考は岩手医科大学の五十周年記念講演を原稿化したものである。岩手の医療史を古代から明治の岩手医学校の創立まで概観したもので興味深い論考である。残念な事に誤りがいくつも含まれており, 蘭学に関係する部分のみ指摘しておきたい。
  - 文中, 伊東玄朴の名が四回出てくるが, これは全部杉田玄白である。
  - 「(長英が) 最初に関係した団体が天保飢饉の飢民を救済することを目的とした尚歯会であり, 集団療法の会であった」とある。尚歯会とは「よわいをとうとぶ雅会」で, 政治経済について論じたが, 集団療法の会とはおかしい。大島高任が蘭学に志したのは「天保十一年」ではなく, 「天保十三年」であり, 大島が蘭学に志したのは「新宮涼庭の意見による」というのも不確実である。
  - 「大島高任・八角宗律・三浦恭園・本堂通伯等の蘭学派の活動によって自然科学専修の日新堂を創立し」と本堂通伯を洋学派, 日新堂の創設と結びつけているが, 本堂通伯は明義堂, 作人館の医学教授であり漢学派である。
  - 「幕府はキリシタンを禁ずるためにその医学をも禁じ, 漢法医学に従うこととなった。それは幕府の政治理論を維持することとなったが, 庶民は禁じられても禁じられても西洋学, 西洋医学を求めてやまなかった」とあるが, 二つの点で誤っている。一つは幕府自体がキリシタンと西洋医学を結びつけて禁じてはいない。例えば, 本文中にも引用した『長崎オランダ商館日記』をみると, 1641年10月31日「印刷した書籍は医薬, 外科, 航海に関するものの外は日本に持って来てはならぬ」という。又キリシタンが処刑されていく記事と平行して幕府の役人が蘭医に面会を求めている記事がある。また, 蘭医学は当初藩医層から広がり町人出身者へも影響していたが, 「禁じられても西洋学を求めてやまない」程にはならなかったものと考えられる。
  - 「三浦自祐は天保年中八角宗律, 本堂通伯らと京都に上り蘭医新宮涼庭を学び」というのも全く不確実な記述である。



○「大島高任，八角宗律等と日新堂を創立した三浦恭園が何故盛岡に独立して回生堂を建てたか」という文に続く部分に疑問への解答は記されていない。

以下省略する。

- 38) 村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記第一輯』岩波書店1956, 307 P
- 39) 同上 第二輯 269 P 以下
- 40) 同上 282 P
- 41) 同上 第三輯 39 P
- 42) 『日本古典文学体系95』岩波書店 昭39, 476～477 P
- 43) 同上 488 P
- 44) 『日本思想大系64, 洋学上』所収『野叟独語』293 P
- 45) 同上 299 P
- 46) 長岡高人編『盛岡藩学通史』盛岡市教育研究所 昭43, 111 P
- 47) 前掲『洋学上』所収『和蘭天説』450 P
- 48) 長田勝郎氏「解剖記念碑としての豊吉之墓」『岩手史学第五巻』岩手史学会 昭25